

天狗谷（てんぐだに）窯跡

有田で最古の窯跡の部類に入る天狗谷は、1630 年頃から 1660 年代にかけて使われ、1600 年代初めに近くの泉山（いずみやま）磁石場で磁石が発見されてから最初に作られた窯として記録されている。磁石には磁器を作るのに必要な鉱物であるカオリナイトが多く含まれており、泉山でこの石が大量に見つかったことで、有田東部で新しい窯が次々と作られることになった。「有田焼の祖」とされ、金ヶ江三兵衛（かながえさんべえ）（1655 年没）の名で知られる朝鮮人男性の子孫が所有する文書には、水と燃料用の薪の入手しやすさから天狗谷が窯の設置場所として最初に選ばれたと記載されている。窯ができた当初は磁器と陶器がここで一緒に作られていたが、後に磁器だけが作られるようになり、現在は有田最古の磁器専用窯とされている。

20 世紀の考古学者たちが有田町で調査を行った 66 の窯跡のうち最初に見つかった天狗谷は、1965～1970 年に発掘され、1999～2001 年に再度調査が行われた。最初の調査は、近世初期の陶磁器窯跡としては有田初の発掘となり、美術史や地質学にとって重大な出来事となった。これらの発掘調査により、少なくとも 4 つの登り窯（のぼりがま）の跡が発見された。焼成時の熱で窯の中にある部屋は次第に崩れていったため、その代わりとなる窯が順々に作られたのである。

この場所に残っている窯は 4 つの窯のうち最も状態がよかったことから、保存と一般公開用に選ばれた。2 番目に発見されたことから「B」窯と呼ばれており、1640 年代～1650 年代にかけて使われたと考えられている。全長約 70 メートルで 21 室あるこの窯は、当時としては大変大きかった。佐賀（さが）藩が管理しており、藩では磁器生産者が窯のどの部屋を使うかを決めるために抽選制度を採用していた。斜面の下から点火するため、下の方にある部屋では熱くなりすぎるおそれがある一方、上の方にある部屋では温度が低すぎてうまく焼けないことも多かった。職人にとって、ちょうどよい部屋を確保することは、自分の技術と同じくらい作品の成否を左右しかねない要素であった。

天狗谷で見つかった壊れて捨てられていた磁器片は、有田の磁器産業草創期を知る貴重な資料となっている。窯の隣には、不完全であったり壊れたりした作品の「物原土層」を見せるため、斜面の一部が発掘された状態で残されている。磁器片が斜めに堆積しているのは、これらが山の斜面に捨てられたことの表れである。まだ発掘されていない遺物を保存・保護するため、実際の窯跡は整備された地表から約 80 センチメートル下の場所にある。

1980 年、天狗谷窯跡は山辺田（やんべた）窯跡や泉山磁石場などの複数の場所と共に、国の史跡に指定された。有田町歴史民俗資料館には、天狗谷窯の登り窯を基にした模型が展示されている。